



消えゆく他者

藤原智美

fujiwara tomomi

ぼくは子供のころから目隠しをして遊ぶ鬼ごっこが好きだった。覚醒しているながら「見えない」という状態はとてもスリリングだった。おおげさにいえば、日常の見慣れた場所から異次元の世界へ移行したような感覚が、とても愉たのしかったのだ。

それを思いだしたくて『ダイアログ・イン・ザ・ダーク』というイベントにいった。光のまったくない体育館のような空間を白杖一つで歩く。そこには牧草地、木、水辺、駅のプラットホーム、バーなどが設えてある。五、六人のグループを組みながら視覚障害者のリードで、小一時間の散歩をした。

子供時代の鬼ごっこは似ても似つかぬ体験となった。記憶にすりこまれたなじみの場所を歩きまわる鬼ごっこ、未体験の真つ暗闇な空間をいくのとはまるで違うのだ。一歩足を踏みだすのも不安になった。参加者たちはみんな肩を寄せあい、ぶつかり合いながら進んだ。

視覚に障害がある人に世界はいったいどのように「見える」のだろうか。言葉をかえると、彼らの身体はそれをとりまく外部を、どのように知覚するのか？

体験的にわかったのは、暗闇のなかで自分をとりまく外部を把握するよりどころとなるのは、「時間の流れ」そのものだけということだ。

たとえばプラットホームにつながる階段は白杖の先が触れたとたんに立ち現れる。けれど登り終えたとただちに消えてしまう。自己と空間との橋渡しはもっぱら時の流れにたよることとなる。それにたいして、ぼくらのようにおおかた視覚だけにたよる場合、階段はたとえ遠くにあつても目に入ったときから登り終えるまで、あるいはふり返ったときもまだ存在している。障害物は視覚によって任意にコントロールできるのだ。視覚は膨大な情報を歩行者にもたらず。

その日、ぼくらは白杖をたよりに声を掛け合いながら恐る恐る進んだ。人の肩や手とい

うものが、樹木や壁と違ってあれほどやわらかく温かいものだと、それまで気がつかなかった。初めて顔をあわせた他人であつても、不慣れな暗闇のなかではたちまちたがいに依存しあう関係になる。気取りや照れはすぐに消えた。

暗闇から抜け出たあと、グループで感想を述べあつた。ひとりの視覚障害者が興味深い話をした。その人は駅のプラットホームで電車を待つとき、かならずだれかの背後につくようにしているのだという。それがもつとも安全だからだ。ところが最近、うまくいかないことがある。気配のない人が増えていて、なかなか後ろにつけないのだ。ならんでいたと思つたら、前にあつたのは柱だつたということもある。以前はなかつたことだという。他人の声や気配をたよりにする視覚障害者にとつては、ひどくやつかしい事態だ。

若い世代のなかには存在感のない者が増えている。そんな声をよく耳にする。けれど柱よりも存在感の薄い人など、ほんとうにいるのか。

そもそも存在感が薄いと、どういうことだろう。覇気がない有様だろうか、公共の場所ですぐ息をひそめている者のことか？ ぼくにはそんな若者が増えているようにはみえない。むしろ車中では床に座りこんだり、人目を憚らず抱き合うカップルなど、

十二分にその「存在」を見せつけている。傍若無人なのは、なにも若者だけではない。公共の場でケータイをにぎりしめ大声を上げているのは、ほとんどが中年男性だ。

この状況は、視覚障害者の「現代人が柱のように気配がない」という証言と、一見すると矛盾している。いま人々はこの上なく自己の存在を発散させているのだ。見方をかえれば、それは行動において自己中心的な面が増し、他人への配慮というものが失われつつあるということでもある。

そう考えればすべて腑に落ちる。白杖をもつた人が身近にいる。声をかけるまではいかなくとも、何かしらここに人がいる、自分が存在するということを、一つの配慮として知らせるということがある。咳払いの一つもするかもしれない。自己の存在を示すことで、白杖の主へのわずかながらの手助けとすることだ。だから彼らもその背後にならぶことができる。いまこうした一連の行為が失われつつあるのではないか。

ヘッドフォンステレオを耳につけ外部を遮断する。あるいはケータイに熱中する。そうした行為に象徴されるように、ぼくらは公共の場面においても、空間と人との関係を自己中心的に組み立てるようになってきている。そこでは他者性というものが失われている。視覚障害者が「柱」と感じる「人」は、じつ

は他者に遠慮しながら群れのなかへ消え入るように立ちすくんでいるのではなく、むしろ他者性を欠如させた自己中心的な存在として君臨しているのだ。

だから何かのきつかけで他人が自己の領域に踏みこんできたとき、一気にその静かであった「柱」は暴力的な人間として立ち現れる。最近、電車や駅、街頭といった公共空間が小さく離れた苛立ちの場と化している。多数の他者性を欠如した自己が一触即発のなかで時間と空間を共有しているのだとしたら、それは当たり前のことなのかもしれない。

ではなにが、人から他者性を奪いとっていくのだろうか。その象徴的事例としてケータイとコンピュータ・ネットワークがある。ケータイに熱中して隣の他者を無視するからというのではない。このメディアそのものが他者性というものを奪いとっていく特性をそなえているからだ。ケータイの擬似的対話は、ナマのコミュニケーションとは次元が異なるものだ。電子的コミュニケーションでは、すべてがデジタルな信号に変換され情報化される。体臭はもとより、身振り、表情も交換されないばかりか、千差万別である声のもつ個性、話つぶりさえもメール交換では失われ、平板な均質化されたものになってしまう。ケータイのむこうに存在するのは、他者ではなく、他者という幻想であり、ぼくらはその幻

想にむかって、ひたすら記号を交換しているだけにすぎない。それに慣れ親しんでしまうと、ナマのコミュニケーションはひどく面倒で「かたたるい」ものになる。なぜなら、他者との対話と交感の技術が失われる（あるいは育っていない）からだ。

若い世代のなかには「むかつく」「かわいい」というこの二語で、ほとんどの自己意識と意見を表現してしまう人々がいる。「むかつく」という言葉には腹立ちや嫌悪だけでなく、不安や恐怖までもふくむ。「かわいい」は対象にたいする肯定的評価の言葉すべてを代替するといつてもいい。

このような場合、他者との深いコミュニケーションは困難になる。もし、こうした貧しい表現方法しか知らない二人の人間がナマのコミュニケーションをしようとすれば、当然なことに相互の理解などさして必要のない、齟齬そごが起こらない次元での、浅いつきあいとならざるをえない。

深まりを期待できない（あらかじめ避けている）こうした交流の薄さを補うのが、コミュニケーションの「量」である。よってケータイには三桁もの「友だち」のケータイ番号が収められ、それを使った通話、通信時間はしだいに長くなっていく。こんな状況があからさまになっていったのは、十年ほどまえのプリクラブームからだだろう。数百枚のプリク

ラが添付されたノートはいまや死滅し、ケータイに取って代わった。他者性を失った自己完結する楼閣のなかでつくられる幻想の「友だち」群は、ますます強力になっていく。そして日々更新されていくのだ。

ぼくは現代の睡眠事情について興味を覚え、一冊の本を書いた。そこで発見したのは、睡眠もかつては肩を寄せあいながら寝る「集団睡眠」がほとんどだったということだ。近代以降、ぼくらの睡眠はしだいに空間的に分節化され、個室に「隔離」されるようになった。かつて睡眠にもあつた他者性はきれいさっぱりなくなった。こうしたなかではイビキ、酒の臭いといった他者性は許容できなくなった。眠りも自己中心になったのだ。

現代では睡眠空間は孤立し分散化している。インターネットカフェは夜間に睡眠空間に早変わりする。カプセルホテルや昼寝専用の睡眠サロンなども、独り寝の空間であり、しかも駅前で簡単に手に入る。いまや睡眠はコンビニ化している。それを可能にしたのが独り寝としての単独眠である。これが新しい市場を生みだしている。

こうした睡眠の単独化、コンビニ化は睡眠障害を訴える人々の増加と表裏一体の現象のように思える。かつて共同性のもとにあつた睡眠スタイルが孤立することで、眠りは自己完結的な行為になる。睡眠の責任は「個」に

集約され、集団のなかで緩和される道はとざされる。

「食」もまた同じ道をたどっている。单身世帯が増えて惣菜が売れる。家庭においても一人食の場面が珍しくない。かつてその共同性を日常的に確認する場面であった食も、いまではハレの世界へ移行しつつある。

このように現代社会はさまざまな局面で自己中心性を高めている。「心の病」といわれるものもその一つである。これもまた「個」の問題として処理される傾向にある。

そもそも心とはなんだろうか？ それはほんとうに一個人に一つずつきちんと収まっている自己完結的な現象なのだろうか？

ぼくにはとうていそうは思えない。むしろ心は個人を基点にしながらも、他者との中間点にも存在するように思える。心は他者との関係のなかで芽生え、そこでもっとも変化していくものだ。一個人が完全にコントロールすることも所有することも不可能なのが心である。けれどこの社会は、心をいわば一臓器のごとくとらえて解釈しようとしているようにみえる。心の病は当事者の病として封じこめようとする。これは自己中心性を強めていく社会状況と無縁ではない。

心の解釈と治療は心理学、精神医学という分野を生みだし発達させてきた。これらはさまざまな問題をはらみながら、バックボ

ンには心や精神という現象のもつ他者性を大きく見失うことはなかった。

けれど最近の「脳科学ブーム」は科学的解を遠くはなれて拡大され、心と精神領域にまで突き進むイデオロギー化を進めているようにみえる。心や精神という現象を脳に局所化して見ていくことは、一方に大きな危険をはらんでいる。

脳は無数のシナプスで構成されるネットワークだ。けれどその機能は、身体という場をあたえられなければ実現できないものである。その意味では脳も身体というネットワークの一部であるといえる。心や精神と呼ばれるものは、そのどの部分にも局所化されず、身体

の全体に存在するものだ。しかもそれは、自己のコントロールはほとんど無力ではないかと思えるほど、他者依存的な存在である。「脳心」と断定してしまう危険性はここにある。ほんらい自分ひとりではどうしようもない面がある心という現象を、一器官に所属するあたかも機能のように見てしまうと、その問題

Ⅱ病のもつ本質を見失ってしまう。たとえばぼくが孤独感のなかでひどいストレスをかかえ、それを心の病だとして自覚した(させられた)とする。そのときの対処法は孤独を癒すために新しい人間関係を構築することだろう。それをさておき、投薬による

脳の活性化で問題を乗り切れると断言するこ

とはバカけている。

心とは身体全体に宿る現象であり、それは自己に軸を置いてはいるが、他者との中間点にも流れ込んでいるものだ。社会は人の数だけあるたくさんの心によるネットワークを構成している。

「心のネットワーク」ときくと、まるで広告コピーのような理想化された言葉に響くかもしれない。けれどそのネットワークは、かならずしもプラスの心的現象だけを受け入れるわけではない。憎悪や不安もすぐさまネットワークを駆けめぐる。その速度はコンピュータという道具の登場でいちだんと速くなった気がする。

対面するナマのコミュニケーションでは、一方の気分が相手にすべて伝染することは少ない。たがいに抑制も働く。けれどコンピュータ・ネットワークではそのコントロールは働かない。なかでも負の精神状態である憎悪や不安は呼応する人をたちどころに選びだし、あつという間に社会化していく。ネットワーク上の掲示板では、そうした罵詈雑言(はりぞうごん)が他を圧倒している。

他者というものを視界から見失いつつあるぼくらの社会は、これからもますます苛立ちを深めていくばかりなのだろうか？

著書に「ぼくが眠って考えたこと」エクスナレッジ (ふじわら ともみ・小説家)